あしたばん

2014年
（平成26年）
3月8日
土曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第四十九号

ここにいなきゃ

三宅島の歴史に導かれて

三宅島の北部にある神着地区。ここに『島役所跡』と呼ばれる木造の建物が、大きな木に沿うように佇んでいる。車で走っているとうっかり見過ごしてしまいそうなほど、静かで厳かな雰囲気のある場所だ。建てられた時期は江戸時代後期と推定され、現存している木造建築の中では伊豆諸島で最古最大の規模を誇り、島内唯一の茅葺家屋でもある。島役所跡は三宅島の在地支配も行っていた壬生氏の屋敷であり、その名の通り役所として使われていたらしい。私たちは壬生家現当主の壬生明彦さんに、お話を伺うことができた。

壬生氏は、もともと島内の神社を統括する神官を担っている一族だ。「僕で六十代くらいかな。詳しいことは本を読んでね、間違ったこと言っていたら怖いし。」と笑いながら語ってくれた。毎年夏に行われるお祭りの時期には、壬生さんは大忙しになる。阿古にある富賀神社からスタートし、伊ヶ谷、伊豆、神着、坪田と五ヶ村を一泊ずつ六日間かけて歩き、神輿を受け渡していくという恒例のイベントがあるからだ。「大変だったんだよ。」と、本音もぽろっとこぼれた。

過去には三宅島郵便局の局長を務めていた時代もあった。この島役所跡がかつては郵便局だったのだ。その後近くに場所を移したが、三宅島郵便局の消印スタンプは今もこの役所跡の外観がモチーフとなっている。その後伊豆、伊ヶ谷、阿古、坪田と五ヶ村全てに郵便局は設置され今もなお残っている。今は三宅島を一周する道路もきちんと整備されているため、車さえあれば五つの郵便局間のアクセスは比較的容易だ。しかし、車などなかった時代に島全体へと郵便物を届けるには、郵便局が一局だけでは難しかったのだろうと壬生さんは語った。

お話を伺う間「いいカメラ持ってるじゃん。」と目を輝かせながら、私たちが持っているカメラを指差した壬生さん。小さい頃から写真を撮るのが好きで、今では一眼レフで撮った写真をパソコンに取り込むこともお手のものだそうだ。腕前も相当で、フォトコンテストで入賞するほど。変化していく三宅島を、宮司と郵便局局長という複数の視点から長い間見守り続けてきた。そんな壬生さんが切り取る光景を、是非見てみたいと思った。

（堀越千晴）

島人の見る島

「どこの島ですか？」「三宅島です。」「三宅島ですか、ぼく、三宅島出身なんです。」僕たちは三宅島に向かう船の中で、ある一人の青年と出会った。ちょっと待ってて下さい、と船内の階段を駆け下りて島の地図を持って来ては、あれこれと三宅島について熱く語ってくれた。彼は三宅島坪田地区出身の大学三年生。帰省のため船に乗っているのだという。

「あまり有名な場所ではなくて、知る人ぞ知るここは凄いぞって場所を教えて下さい。」大路池や七島展望台などの観光スポットを紹介してくれた彼にそんな要望をぶつけると、目をキラキラさせながら僕たちの知らない三宅島について語り出した。

三宅島を一周する道路の脇にある阿古地区を一望出来る絶景スポットや、伊豆の先にある大久保浜の風景、昭和十五年の噴火で出来たひょうたん山、昭和三十七年の噴火で出来た三七山などの三池地区の噴火跡を一望できる火の山峠は知る人ぞ知る絶景スポットだ。聞けば、山の中腹を一周する道路は、雄山が鉢巻きを巻いているように見えることから、鉢巻き道路と呼ばれているらしい。

今回の滞在では、もっと三宅島を歩こう。彼から聞いた話には、僕たちにそう思わせる力があった。これまでに十回近く渡航してきた三宅島大学のメンバーも、聞いたこともない場所・知らないことばかりだったのだ。

三宅島で生活している人が僕たちよりも島に詳しいことは当然のことである。しかし、例え二年半に渡ってこの島に通い続けても、地元の人には見えていてまだ僕たちには見えてこない、そんな島の姿には何かとても惹かれるものがあった。きっと、三宅島で僕らが何気なく通り過ぎていく脇道のその先には、未だ見ぬ島の表情や新しい発見が、これでもかというくらい眠っているのだろう。

「こうやって三宅に来てくれる人がいるのが嬉しいんです。」そう言う彼のふるさとを愛してやまない姿はこちらも思わず笑みがこぼれてしまう程の微笑ましいものだった。そして、「島で見かけたら声かけてもいいですか？」と聞かれると、またもう一人三宅島に知り合いが増えたようで嬉しくて「お願いします！」と即答せずにはいられなかった。

実は彼の実家は三宅島で割烹を営んでいるらしい。せっかくの巡り合わせだ、「あのときはどうも。」と割烹の暖簾をくぐってみたいと思った。

（秋庭大志郎）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

森づくり 島づくり

島一周道路を時計回りに散歩していると、ふと『森林組合』の文字が目に入った。海のイメージが強い三宅島にも森林組合はあるのだなという第一印象だった。興味の赴くまま、玄関をノックする。三年前に「村のために何かしたい。」との想いで三宅島にUターンしたという事務局長の加藤守さんは、快く取材に応じて下さった。

まるで墓標のように山に点在する立ち枯れの白い木々は元々、スダジイなどの広葉樹が生い茂った森だったそうだ。スギが群生していた箇所もあり、その手入れ・管理をし、木材として売ることを生業としていたが、二〇〇〇年の噴火で火山ガスが大量に噴出し、木々は枯れ、継続は断念せざるを得なかった。

以降は、荒れた土地に植林して昔のような森に戻す緑化事業に力を入れている。まっさらな地に八丈ススキという背丈の高い品種を植え土地をならし、それを刈ってタブ、スダジイの苗を植えるという手法をとっているとのこと。苗は、まだまだ働き手の六十代前後の人に育ててもらうことで、少子高齢化が進み雇用も少ない三宅島の雇用促進を図っている。

「ただ木を植えるだけでなく、島全体で考えている。」と語る加藤さんは、数十年単位の時間がかかる『森づくり』から、三宅島の『島づくり』までを、長い目でゆっくりと見出そうとしているのだと思った。

（深澤　匠）

帰って来れる故郷

二〇一一年九月から始まった三宅島大学プロジェクトが今年で満期を迎え、閉校することとなった。今回私は、当初から三宅島大学のリサーチャーとして参加している吉田あんなさんに、三宅島大学との思い出を振り返るインタビューを行った。

彼女にとって、三宅島大学の一環であるキッズリサーチプロジェクトは、とても印象に残る体験だった。大学を寺子屋として開放する代わりに、子どもたちに島について教えてもらうというプロジェクトだ。初日の集まりはあまりよくなかったが、口コミ、親や子ども同士の強い繋がりのおかげで、徐々ににぎわいが増していった。このプロジェクトを始めてから、子どもが好きになったという。はじめは子どもとどう接すればよいか分からなかったが、一緒に無邪気に走り回り、名前を覚え合い、全力で仲良くしているうちに自然と友達になっていた。子どもたちにカメラを渡せば、大人の想像力を超える写真を撮る。子どもたちの自由な発想から、私たちは学ぶことが沢山あり、彼らの素直な反応や姿に彼女は魅力を感じたと言う。

「三宅島はいつでも帰って来れる、ふるさとの様な場所になった。」と語ってくれた。「三宅島大学がなければ三宅島との縁はなかっただろうし、キッズリサーチがなければ島の子どもたちと関わることはできなかったと思う。」

静かに思い出を語る彼女からは、しばらくのあいだ島を離れる寂しさと共に、またここへ戻ってくるという強い思いを感じた。

（白羽相仁亜）

郵便局巡り

颯爽と走る赤い車。郵便局の集配車は、島の人たちに郵便物を届けるため島中を駆け周っている。郵便局は島に五つあり、それぞれ違う消印がある。その消印を集めて周る人がいるとの情報を得た私は、彼らのように消印を集めながら、郵便局員さんにお話を聞いて周る旅に出た。

まずは、三宅島大学から一番近い阿古郵便局。次は伊ヶ谷郵便局へと向かった。驚くことにここで働いていたのは、三宅島大学初の卒業生・田中耕介さんのお兄さん。彼に、『三宅島・御蔵島風景印島めぐり』という消印を集めるためのシートを頂き、坪田、三宅島、伊豆郵便局へ。三宅島郵便局員の前田昇一さんにお話を伺った。このシートが作られたのは噴火前で、三宅島PRの為に内地の郵便局で切手と共に一週間限定で販売されていたものだ。今では伊豆と伊ヶ谷の郵便局にしか残っておらず、噴火前の地形が分かる貴重な資料でもある。

郵便局巡りをして感じたのは、島の人たちとの新しい出会いと繋がり、そして温かさだ。

島の標識や看板、建物や置き物。細部に注目すると、新しい視点で島を見ることが出来た。そして私たちの活動が広がるにつれ、どんどん関係性が繋がっていくことに喜びを感じる。今回の旅で出会った方々はとても温かく、丁寧にまちや歴史、人を紹介してくださった。ぜひ皆さんにも、この体験をして欲しい。島の人たちにとって身近な郵便局を巡ることは、島の生活に近づく一歩だったのかも知れない。

（細井美香）

三宅島大学 卒業式・閉校式

日時　3月9日(日) 9:00-11:00

場所　三宅島大学本校舎（御蔵島会館）

三宅島大学の第二期生卒業式および閉校式を開催いたします。三宅島大学の最後の行事となります。多くの方のご参加、お待ちしております。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。